
刀の時代

るうね

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

刀の時代

【Nコード】

N7093F

【作者名】

るつね

【あらすじ】

井上源三郎は土方に、自分は近いうちに戦で死ぬ、と告げた……。

「俺は、近いうちに戦で死ぬ」

井上源三郎は、そう言った。深夜、土方の部屋を訪れての第一声である。

「死ぬ、とは？」

「死ぬは死ぬ、だ。あの世に逝くってことだよ。それ以外の意味があるかい、歳」

「源さん、俺にはよく意味が……」

土方が、鬼の副長と呼ばれた男が戸惑っていた。

源三郎は喉の奥で、くつくと笑う。

「鬼の副長の、そんな顔が見れるとはな。それだけでも言った甲斐があつたつてもんだ」

「冗談なのかい」

「いや、本気だ」

表情を改め、源三郎は言う。

「戦で俺は死ぬ。最もみじめな形で、な」

「……どうして」

「あれよ」

源三郎は、顎をしゃくつてみせた。

「兼定？」

「兼定だけって訳じゃない。刀全てさ。刀の時代は終わった。お前には分かってるんだろ？」

土方はうつむく。行燈あんどんの光が、彼の端正な顔に影を差し、表情を隠した。

源三郎は、掛台に置かれた兼定に目をやったまま、

「ありゃ、いい刀だ。京に来てから、お前が何人斬ったのか知らんが、刃こぼれ一つない。だが、それでも銃を持った兵には敵わん」

源三郎は兼定から視線を切り、土方を見つめた。まだうつむいて

いるが、話を聞いていないわけではないだろう。

「刀の時代は終わった。そして、このままだと新撰組も終わる。単なる剣客集団、人斬り集団じゃあな。新撰組は変わらにゃいかん。生き残るためにな」

「なぜ」

土方は顔を上げた。少し青白くなっている他は、いつもの平静な、鬼と呼ばれる男の表情に戻っていた。

「なぜ、俺にそんなことを？」

「お前なら変えられるからさ。新撰組を」

「局長が」

「ありゃ、だめだ」

源三郎は言下に否定する。

「剣に生き剣に死す、ってやつだな。刀の時代が終わったと悟っても……いや、もう悟ってるのかもしれないな。それでも奴は刀を手にした生き方しかできねえ。大馬鹿野郎さ」

源三郎は細い目を、じろりとむき出しにして、土方を見つめる。

兄弟子としての威厳とでも言うのか、その眼光には、鬼の副長をひるませるだけの力がこもっていた。

「歳、お前は違う。新撰組を変える、いや救うために自分の信念を曲げられる男だ」

「買いかぶりですよ」

「なら、それでいい。買いかぶられたままでいる。俺は刀にすがって、みじめな死に様を晒す。お前はそれを利用して、新撰組を作り変えるんだ。山南の時も平助の時も、そうやってきただろうが」

「源さん」

「話はそれだけだ。邪魔したな」

源三郎は腰を上げる。まだ何か言いたそうな土方を無視し、部屋を出た。

雪が、降っていた。

一カ月後、俗に言う鳥羽・伏見の戦いが始まった。

ここが、俺の死に場所になるな。

堤の上から、薩長の軍を見下ろしながら、源三郎は思った。

勝てる戦であったはずなのだ。銃火器など装備こそ薩長軍に劣っていたとはいえ、幕軍は兵力にして三倍、本気で戦う気があれば、まず負けることはなかったろう。

幕軍にとつて痛恨事だったのは、御旗が薩長に流れたことだった。薩長軍が前線に錦の御旗を掲げたのは昨日のこと。これにより、薩長軍は「官軍」となった。必然、幕軍は「賊軍」ということになる。その事実が幕軍を動揺させ、後退せざるを得なかった。老中、稲葉正邦を頼つて淀まで後退したものの、稲葉は幕軍の淀城への入城を拒否。彼は、「官軍」となった薩長軍と事を構えるのを恐れたのだ。これもまた、錦の御旗の効果だった。

やはり、斬っておくべきだったか。

源三郎が思うのは、岩倉具視のことであつた。

源三郎の隊内での職務は、主として対外的な職務や要人の接待であつた。その関係で公家の岩倉とも二、三度、顔を合わせたことがある。

危険だ。初見で、そう思った。

己の保身しか考えていない。そのためなら、幕府、朝廷、いやこの国そのものを潰しても、平然としていられる男だ。怪物、である。今回、朝廷が薩長軍に錦の御旗を与えたのは、岩倉の意見に因るところ大だという。幕府を潰した方が、己の利益になると判断したのだろう。岩倉を斬っておけば、現在の状況いまも、また違ったものになつたはずだ。

考えても詮無いことか、と思考を打ち切る。

薩長軍、いや官軍からの銃撃が勢いを増した。銃弾の雨が、堤の

上まで激しく降り注ぐ。

さて、行くかな。

源三郎は堤から下りた。無意識に差料に手をやる。無銘だ。だが、今日まで自分を守ってくれた友であった。

ああ、なんだ。

源三郎は苦笑した。

俺も勇のやつと同じか。剣に生き剣に死す大馬鹿野郎。それを隊のためと偽りつつ、死に場所を探していた。これからどんな世の中になるにしろ、そこに剣客の居場所はない。

初めて剣を握ったのは三歳の時。以来、毎日の稽古は欠かしたことがなかった。雨の日も雪の日も、どんな高熱を出した時も。必ず、剣が傍にあった。

死ぬ時も。

源三郎は刀の鯉口を切り、堤の陰から走り出た。一斉に官軍の銃口がこちらを向く。

腹を撃たれ、血の泡を吐いた。右足を撃たれ、地面に転がった。

腕を撃たれ、刀を手放した。彼が三十年以上かけて作り上げた肉体を、銃弾は容赦なく破壊し、蹂躪していった。

源三郎は、踏みつけられた蚯蚓みみずのように地面を這い、なんとか取り落とした刀のところまでたどり着く。刀身が半ばから折れていた。泥と血にまみれた源三郎の頬に、一筋の涙が伝った。己が三十年を、一瞬にして否定された男の涙だった。

その脳天を銃弾が貫いた。

泣きながら、源三郎は死んだ。

この日を境に、土方は西洋の用兵を学び始め、新撰組の装備も洋式へと変化していくこととなる。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7093f/>

刀の時代

2010年10月8日15時32分発行